

＜北海道熊研究会 会報＞ 第60号 2016年 2月 15日

ご意見ご連絡は下記の email へどうぞ

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nicholsピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～58号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Associationの活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

II <アイヌが考えた人(アイヌ)と神の世界について>

アイヌは自然をどう捉えていたかを識って戴きたいので、今回は、アイヌが考えた人(アイヌ)と神の世界について、紹介しましょう。

狩猟採集民族であるアイヌは、食料を得る都合から、地域毎に、少人数でコタンで暮らし居た。多人数だと、食料の枯竭コツを来しかねないからである(門崎の見解)。

「コタンkot-an : アイヌの住居」の義であるが、高倉新一郎は「kot=住居、an=在る」の義とし(「北辺・開拓・アイヌ」1942年)、コタンと称する一戸から多くても10数戸、最多で20戸で生活したとある(\*高倉)。金田一京助は「kot=窪-an=在る-i処」の義であろうとし、穴居在る処の義と推察している(探訪随筆、1937年)。知里真志保は(著作集1、p.351)、「kotanは「住居の在る所」の義で、家一軒の所でもkotanであり、ある季節だけ住居する場所もkotanと言うと述べている。

往時のアイヌはコタン毎に、日常的には孤立した暮らしをしていたために(門崎の考え)、アイヌ語の発音や語義に地域的な方言があるし、個々の観念事象についての考えも、違いがあり、それも事象により、小差大差がある。

例えば、熊(罫であるが)の神について言えば、アイヌ民族出身で、東大言語学科出で、北大で教鞭をとっていた、アイヌ言語民俗学者の知里真志さんは(著作集、3、p.199)山の奥にある彼らの本国(神界)としているが(地域は不記で不明だが)、釧路アイヌに関し詳述している(佐藤直太郎さんは(1888生～1975没)、「釧路アイヌのイマデ」、原著は1958年で、ガリ版刷りである。活字版は1961年、佐藤直太郎郷土研究論文集に掲載、p.95-178)、天界の神の世界の6層からなる、その最上階に熊の神は居ると述べているなどのように、大きな違いがある。

本報では釧路アイヌが考えていたアイヌと神の世界について、前記書から紹介する。

- ① 地上を、アイヌ・モシリ(人間の住む世界)と称し、生きているアイヌとアイヌの為に、天界に住んで居たカムイ(神)達が扮装(アイヌ語で<sup>アハ</sup>ハバと言う)して存在する世界と観た。
- ② アイヌに福をもたらす善良な神達は、天上界(カンド・モシリ)で、アイヌと同じ姿で、同じような家に住み、同じような家具道具を用い、食べ物も同じような物を食べ、家族もいれば、夫婦子供も居ると言う世界観を持っていた。但し、天上界は6層からなり、上界ほど、アイヌに福をもたらす神が住んで居るとした。そして、最上界の直ぐ下の第5層界には、ピトウ(神人と訳しておく)と言うアイヌの先祖になった神や、アイヌに生活の道を伝えたサマイクルやオキキリマイ(他の地方ではオキクルミ)と言う神達(ピトウ)が住んでいるとした。
- ③ アイヌの死者は地界の最上階(地面下)から、地界の5層までに行く事が出来、そこで生きているアイヌと同じ姿で暮らして居るとした。
- ④ アイヌに不幸をもたらす神はその最下層階に住んでいるとした。
- ⑤ 最下層の第6層界は地獄界で、アイヌが行く世界では無く、災害や病魔の神が暮らす世界と観た。ここでも、悪神はアイヌと同じ姿で暮らして居ると観ていた。

以下に佐藤さんの言葉を紹介しよう：

神の住む天上の世界なるカムイ・モシリでは、神様は人間の世界なるアイヌ・モシリでアイヌが生活しているのと同様に神もアイヌの姿をして、アツシ織りの着物を着て、普通のチセ(家)に住み、日常の道具を使用して生活しているが、その神がアイヌモシリ(人間界・地上)に降りる時には、扮装して現れるのである。草木・虫魚・鳥獣は勿論、岩石湖沼のような無生物に至るまでことごとく神の現われであり、ラマチ(靈魂)があると信じている。そのような扮装をして地上に現われているものは、いつかその扮装を解かれる機会があれば、カンド・コロ・カムイ(天津神)が居るカンド・モシリ(天上界)に還って元のアイヌの姿をして暮らすのであるから、アイヌは毎日扮装した神に取り囲まれて暮らしているのだと言う。そしてアイヌの生活に利益を与えるカムイはピリカ・カムイ(善神)であり、これに反してかれらに禍をもたらすカムイはウエン・カムイ(悪神)と決めているのである。このカンドモシリ(天上界)とアイヌモシリ(人間界)の中間にモチツク・モシリがあつて、ピトウという神人のいる世界があるという考え方は釧路アイヌ特有の思想ではないかと思われる。釧路アイヌによれば、ピトウはカムイより一段低くアイヌよりは一段高い存在で、いわば神人であるとしている。もう少し補足して言えば、アイヌが住むアイヌモシリの上に位するカンドモシリは六層に分かれ、その最上層がカンド・コロ・カムイ(天津神)が居るカンドモシリ(天上界)である。その下のアイヌモシリとの中間に幾重ものモチツク・モシリ、また「モカンド」というものがある。ここはピトウの世界であり、そのピトウも上層にいるものと下層にいるものによって、その位に差等があると言う。またアイヌモシリ(人間界)の下にも六層あつて、ポクナシリ(地底の国と訳しておく)と言う。この5層まではライクル(死んだ人間)が行く冥府であつて、靈魂はここで生前と同じ生活をしている。ただし人知れず変死したものの魂は、そこに行けないで迷っている。最下層は、いわゆる地獄で、ここは人間の行くところではなく、ウエン・カムイ(悪神)のいるところであつて、人間にたたりをするものはここから出て来るのである。バイカム・カムイ(疱療の神)なども、ここから遠い海の離れ島に通ずる洞窟から出て来て、海から川を遡って人間に襲いかかるのだと言われている。(了)